

として今日に至っている。上村氏の日経新聞の俳壇その他数多くの入選句を拝見させていただいたが、どうしても身に覚えのある句にひかれた。

○寒星や哨兵たりし日は遠し

○流星や異國の丘に見し記憶

北方鎮護の誇りは、やがて「異國の丘」の屈辱に耐えなければならなかった。

○蓬萌ゆ飢をしのぎし日は遠し

食える野草は総て目にとまる餓鬼の道であった。

○落ち葉ふむ音のとどきて嘶いみなけり

愛馬は主人の足音も聴き分けた。行軍中五分間休憩でも先ず水飼い、「馬は活兵器」と愛護されたが、武装解除と共に嘶きが荒野に消え、軍馬や軍犬には復員がなかった。

○牛曳いて枯野を急ぐこともなし

シベリア生還者も高齢化は避けられない。長寿に感謝して余生を全うしていただきたい。

(新潟県 山崎 菊司)

貴重な体験シベリア抑留

新潟県 高橋 吉郎

シベリア抑留は貴重な体験であると信ずるものである。この体験を後世に伝えることは最も大切である。再びこのようなことがあってはならないからである。戦争を体験しない国民に知らしめなければならぬと思う故に、体験者は自己の貴重な体験を黙して語らざることなく広く国民に知らしめなければならないと、体験者の一人として痛切に思う次第である。

何事も原因なくして結果はない。シベリア抑留問題も第二次世界大戦の結果生じた、史上かつてない悲惨にして苛酷な戦争が終結してから起きた出来事であった。シベリア抑留問題が単なる戦争の悲劇として忘れ去られてしまわれては、また再びこのような戦禍が起きてしまうおそれがあると思われるため、このシベリア抑留体験記を書くことにした。

冒頭に、シベリアの捕虜という不名誉な言葉が巷間に言われているが、これは誤りである。なぜならば、第二次世界大戦において日本は、我が国との不可侵条約を一方的に破棄し侵攻して来たソ連軍と交戦中、昭和二十年八月十五日、無条件条約を受諾した。我が国は天皇陛下の玉音によって、武器を放棄して戦いをやめよ、耐え難きを耐え、忍び難きを忍べと命じたのである。軍はこの命により戦いをやめ、武装解除を受け、敵の軍門に下ったのである。戦争が終結したのであるから祖国に帰還せしめなければならないものを、ソ連は不法に酷寒の地シベリアへ強制連行して抑留し、銃剣を突きつけて強制重労働せしめたのである。故にシベリア抑留者は不名誉の捕虜でなく、祖国のために不法に抑留されたものであるということの後世に明確に伝えなければならないものである。

我が国は明治三十七、八年の日露戦争において世界一を誇るロシア陸軍を打ち破り、続いて日本海の海戦において三十余隻のロシア艦隊をわずか十余隻の艦隊によりこれを撃沈せしめ、東洋の一小国が一躍世界の

強国となったが、これにより軍人がおごり高ぶり、ついに政治の実権を握るに至った。日露戦争で中国東北部、旧満州の権益を得て、これを足場として、眠れる獅子と言われている、国土も人口も我が国の数十倍といわれている中国に戦争を挑み、泥沼の戦いに追い込まれ、ついに破局に至った。にもかかわらず、更に米・英・仏の列強を敵にまわし無謀な戦いを行い、ドイツと共に第二次世界大戦を引き起こし、数百万の尊い人命を失い、国土は焦土と化し、再び立つことが出来得ないまでの苦境に追い込まれた。そしてポツダム宣言を受諾し、遂に無条件降伏という無残な敗戦を喫してしまった。父祖が血と汗で得た権益をすべて失い、東洋の一小国であった徳川時代に戻ってしまったのである。これは国運として片付けてしまえない無残な敗北であった。

敗戦の原因は軍隊にあって、結果としてシベリア抑留という史上かつてない悲惨な苦闘屈辱を受けることになったが、軍部さえあのような無謀な戦いを起こさなかつたらこのような事は起きなかつたのである。

小生は、昭和十八年十月五日召集となり、同年同月二十日、会津若松東部第二十四部隊（歩兵第二十九連隊）から満州第一三八七部隊に転属となり初年兵教育を受けることになった。軍隊というところは階級的格差が極端であり、階級は一ツ星の二等兵から十八階級もある。入隊後初年兵教育が終わる一期検閲まで普通は三カ月であるが、これが終わると星一ツ増えて二ツとなり一等兵となる。二年兵になっても成績の良い者でないとなれば上等兵になれず、三年兵になってやっと上等兵になる。下士官の曹長まで兵と共に同一兵舎に起居しており、曹長も古参となれば営外居住となるようであった。将校は立派な煉瓦造りの官舎に居住しており、兵、下士官は頭をつっかえる掘っ立て小屋同然の建物で両側は土盛りがしてある。中に入ると幅六、七メートルで中央に一メートル三十センチくらいの板敷き廊下となって、引出しのないテーブルのような粗末なものが置いてある。これは食事を分配するテーブルなどに使われていた。廊下をはさんで両側に、二メートルほどの廊下より三十センチも高い板敷きにコーリ

ヤンガラで作ったアンペラのようなものが敷いてある。この上置いてあるゴツゴツしたズックのような長方形の寝袋のようなものに乾草を詰めたものがマットレスのかわりで、ここが兵士の起居する場所であった。各人一人に毛布が六枚支給されていた。これは就寝の際、使用するものであった。このような兵舎に起居し初年兵生活が始まったのである。十月二十日というのに満州では氷が張って、北風が木一本ない枯野の原を寒々と吹いていた。兵舎の北側に物干し場があり、樹木一本もなく物淋しい風景である。出征する際駅頭で村人達が大勢で日の丸の小旗を振って「万歳万歳」と見送ってくれ、決意を新たに入隊したのであるが、こんなはずではなかったと張りつめた気持ちが抜け、憂鬱な気持ちになるのであった。

やがて初年兵教育が始まって一カ月ほどたったある日の日曜日であった。銃後の内地から慰問袋が送られて来た。あけて見ると、マカロニーが入っていた。軍隊は一膳めしである。日曜のほかは間食は上がらない。激しい屋外での演習で働き盛りの二十五歳であっ

た小生は毎日空腹をこらえて過ごしていたので、慰問袋のマカロニーが宝物のように見えたのであった。早速受け持ちであり教育助手である班付上等兵のところへ行き「上等兵殿、内地から送られて来た慰問袋を開けてみましたらマカロニーが入っております。どのようにしたらよくありますか」と申し出たところ、上等兵は、「せっかくな内地から送られて来たものだ、飯盒で煮て食べろ」との指示。早速指示通り飯盒に入れてペーチカの上上げて置いたが、石炭が粉炭でなかなか火力が上がらない、もう間もなく就寝点呼となるところからペーチカの焚き口の所に置いていたところ、間もなく週番士官の少尉が下士官を伴い颯爽とやって来た。週番下士官が「点呼」と号令をした。内務班長の熊坂軍曹が「総員何名異常なし」と報告した。週番士官は注意深く内務班を見回していた。班内を通り過ぎようとしたとたん、「やや、これは何じゃ、天皇陛下下の類兵器を」と言い「熊坂あとでわしのところへ来い」と言って立ち去って行った。焚口にあった飯盒を見て週番士官は大きさに言い残して行ったので

あった。点呼も終わり消灯ラッパが鳴り、一日の激しい訓練も終わり心身ともに疲れて唯一の休憩場となる。日曜日であったが、就寝時となる頃も、洗濯や訓練で破れた被服の繕い物などをしたりして初年兵には暇がなかった。やっと床に就く頃、週番士官の所から熊坂班長が帰ってきて、青ざめて怒りをふくんだ顔となり、班全員に正座せしめたのである。余程週番士官に厳しく注意されたことが推察された。二時間近く正座し、もう夜中になっていた。同年兵はうらめしうに小生の顔を見ているような気がしたが、小生は班付上等兵の指示によってやったことであり、まさか軍の使用している飯盒がそんな大切なものとは思っていなかった。そんなに大切な飯盒なら平素の使用を禁止すべきであると思った。しかしよく考えてみるとペーチカの焚口に置いたのがまずかったのかも知れない。石炭の火力が強いので直接火に接すると損傷するおそれがあるからだ。正座はとけたが別に小生には何のともめもなかった、まだ一カ月の初年兵であったからであったが、それからが大変であった。すっかり目をつけ

られてしまい、事ごとに制裁が飛んで来たのであった。とんだ慰問袋をもらってしまった。慰問袋が転じて制裁袋となってしまうのである。

態度が悪いと言って前ささえを長時間させられ、額から脂汗が流れたり、また、ある時は頭部を数回殴打されたりした。目から火が出ると言われるが、このときは、目の上がチカッと火が出たような感じがした。頭部に三本の筋がこぶとなつてできた。このことは終生忘れることができない。屈辱的な制裁を受けた感じ、いまだに忘れられないのである。小生が初年兵教育当時の分隊は五十人ほどであり、分隊長は軍曹で、班付として兵長一人、上等兵三人であった。それに頭の弱い二年兵が一人、あとは初年兵ばかりであった。同年兵には警察官から召集を受けて入隊してきた者も何人かいたが、小生のように感情的に制裁を受けた者はなかった。軍隊というところは警察官であった者に対しては特別視していたようであった。貴様は地方では警察として威張っていたが軍隊ではそうはいかぬと、ことごとく憎悪の目で見られてしまった。

初年兵教育は十月二十日から四カ月間の厳冬の期間で、満州では零下二十度から三十度にもなった。屋外で訓練を受けたのであるが、なまやさしいものではなかった。多少の吹雪でも訓練は行われた。あるとき訓練が終わり夕食後、兵器の手入れをしていたが、剣ザヤの中の雪がとけて水滴となって錆びるおそれがあるところから、銃についている櫛杖という細い一メートルほどの金属に布切れをつけて剣鞘の中を拭き取るべく突っ込んだところ、布切れが外れて残ってしまい、どうしても取り除くことができなかった。そのまま剣を押し込んで就寝点呼を受けたところ、班付兵長はこれを見ていたものと見えて、剣をよこせといってこれを取り、抜こうとしたが抜けないところから、いきなり剣で数回殴打された。班付上等兵が持つてこいと言ったので持つて行ったところ、ドライバーでネジを廻すと簡単に布切れがとれたのであった。初年兵の悲しさ、わからないままこのような苛酷な制裁を受ける結果となった。どうして思いやりの心情で教えてくれなかったのか、大切な頭部を剣鞘のまま数回殴打し

なければならぬのか、軍隊というところは暴力が許されるのであろうか、もしこれがため傷害致死という重大な事件が起きたならどのようなことになるのであろうかと考えて啞然とした。

三十歳に近い召集兵で妻子があつた初年兵が入浴して帰つて来て、タオルを二つ折りにして針金に掛けた際、隣の戦友との差が三センチほどあつたとして、ピントをはられて頬がはれあがり便所の中で泣いていた。余程ひどく殴打されたものと見えて頬がはれあがり、歯ぐきから血がにじんでいた。彼は飯を食ふことが出来ないと言つて手で頬をおさえていた。こんなことまでせずとも、粗暴な教育に怒りさえ感じたのであつた。

しかしこれらのことは日常茶飯事のことであつたのである。これらの殺伐とした軍隊生活の中では豊かな人間関係は失われていた。強固たる団結をもつて戦いに立ち向かわなければならぬ軍隊の教育から逸脱していた。暴行傷害など、我が国刑法で禁止されて処罰されることが軍隊ではまかり通り、平然と行われてい

た。暴力によって制圧し、絶対服従という問答無用の封建的なやりかたであつた。文明国として近代的なところは見受けられなかつた。常に天皇陛下を持ち出し、無理なことでも押し通すという旧態依然の方式が敗戦の原因ともなつたことであつた。

初年兵教育が終わつて昭和十九年三月初旬、二ツ星の一等兵に全員なつて各部所につき、憲兵志願や幹部候補生、下士官志願などに出る者もいたが、小生は軍隊そのものに期待は持てなかつたので、召集兵としての任務に忠実であることを期し、西東安貨物廠の警備に軍曹一人、上等兵二人、一等兵五人、合計八人で分遣隊として出向することになつた。

勤務は貨物廠の警備であつた。糧秣や馬糧などの野積みが数十棟連なつて並んでおり、常に糧秣受領の友軍の車両が絶えなかつた。また軍用列車の通過駅にもなつており、重要な地点であつた。警備勤務は、立哨、動哨、警戒と一時間ごとに三時間を八回で一昼夜二十四時間交代となつて勤務していた。三月とはいへ、満州の夜はまだ零下十五度から二十五度ともな

り、一時間の立哨も容易ではなかった。深夜の立哨は身体が冷えて僅か一時間が苦痛であった。

ある日、銃を構えて警戒していたが、下腹部がきりきりと痛んで立哨に耐えられなくなり、衛兵司令の軍曹に申し出て交代してもらい、休ませてもらった。痛みが止まって、深夜のことであり、衛兵所も暖かかったので、ついうとうとしてしまった。とたんに、「起きろ」とどなりつけられて起きたところ、いきなりピントが飛んで来た。頬をしたたか殴打された。「貴様、腹の痛い者がイビキをかくことが出来るか」とえらく叱り飛ばされたのであった。僅か三十分ほどのことであつたが、厳しいやりかただと思つた。温まるについうとうとするのである。そのようなときはイビキをかくこともある。何もピントを張らずとも口頭で注意すればよいと思つた。怠けるつもりでイビキをかけたなら納得するが、これくらいのことだと、軍隊の厳しさを痛切に感じた。

やがて警備勤務も慣れてくるとともに初めて見る大陸の春がやって来た。名も知れぬ花が一面に咲き乱

れ、雁、白鳥、鶴などの渡り鳥が飛来し、まさしく極楽浄土のような観を呈するのである。冬枯れの荒涼たる原野が一変して花園となり、鶴などは逃げようともしない。満州は開拓したならば王道楽土となる。日本は狭いと思うのであつた。

四カ月ほどで歩哨勤務も交代となり、東安に帰隊した。入隊して八カ月も過ぎて軍隊というか雰囲気にも慣れてきた。苦あれば楽ありで、今度は、東安で最も大きい貨物廠で、本隊と言ふべき貨物廠の経理部将校が詰めている事務所の門番のような、地方の守衛のような勤務であつた。二人勤務で将校に敬礼をするのが任務のようなものであつた。

また、将校の寢具などの整理整頓するのも任務であつた。二人勤務であつたが、歩哨勤務のような一昼夜勤務でなく、朝出勤して夕方帰るといふ勤務で雑役も兼ねており、楽な勤務であつた。われわれ兵隊はゴツゴツしたズックのような厚い袋の中に乾草を入れたマットのような敷布団一枚に毛布六枚という寢具であつたが、将校ともなれば立派なベッドに羽根布団に毛布

で、それも高級品ばかりであった。この一面を見ても当時の我が国の軍隊がいかに贅沢な待遇を受けていたかを知ることが出来る。銃後の人々が物資が欠乏して配給制度で苦しんでいる最中に、このような贅沢をしてよいのだらうかと思った。われわれがソ連に抑留されていた際、ロシア人が、ジャボンスキーはクーシャチ（食うこと）ばかり考えて、マシンナー（機械）を作ることをしなかったから戦争に負けたと言っていたが、実際その通りであると思つた。どんなに軍部がおり高ぶっていたかがうなずけられたものである。軍人勅諭に「軍人は質素を旨とすべし」とあるが、これに反していた。礼儀も信義も失われていた。すべての点において軍人精神五カ条の勅諭に反してしまつていた。

このようなことでは戦いに勝つはずはない。すつかりスターリンに日本を破る時はこの時であると見抜かれてしまい、僅か一週間の戦いで火事場泥棒のように関東軍六十万が五カ年間過ごすことができるといふ膨大な糧秣をはじめ、すべての物資を占領された。そ

ればかりでなく、人さらいのごとく六十万という人員を抑留され、そのため我々は地獄の苦しみを受けるに至つてしまつたのである。

昭和十九年夏頃、ソ・満国境に近い虎林にわれわれ一三八七部隊員は移駐した。虎林は、ソ連軍が不法侵攻して来た突破口となつた所である。その先の虎頭はソ連兵が国境守備しているのが見えた。満州の夏は内地日本と同じ、夏は猛暑であつた。特に虎林は風はなかく蒸し暑く、虎林熱に冒され命を取られることがあつた。耐熱演習が一月も続けられた。軍服の内側は汗でぐっしょりであつた。生水は一切厳禁である。井戸水であるが沸かさなければ飲めない。これを聞かずに飲んだならいっぺんに腹をやられてしまう。苦しい演習が続けられたが、ようやく涼風が立つ秋、虎林貨物廠の満人労務者が物品持ち出しする警戒監視の任務に、満服を着て就いた。警官の現職から召集となつた同年兵と二人で、その長は一般人から召集となつた兵長であつたが、彼には一目おいていたので精神的には楽な気持ちであつた。気の毒に思つたのは、徴用され

て来た満人労務者が期間を勤めあげて帰る際新品の満服を持ち出そうとしたのを発見したので、同じ満人に引き渡したところ、目をそむけるような折檻を加え余罪や仲間の名前を自白せよとしたが、彼は絶対仲間の名は出さなかった。彼らが命がけで仲間の名前は出さずこれに耐えたことに感心させられたことであった。抑留中反動を摘発すれば祖国へ帰してやるといふソ連の誘いによって戦友を売った抑留者もいた日本人とは人間性においてその比ではなかった。

昭和二十年五月頃、虎林から東安の兵舎に帰って来たが別に何をするともなく待機していた。何か起きそうな不穏な予感のする毎日であった。その頃既に上層部ではソ連軍の動向を予知していたものと思われる。状況は思わしくなく暗雲が迫りつつある気配がしてきたのである。そのような毎日の昭和二十年八月八日、移動することになった。勿論、われわれ兵にはどこへ行くかは知らされなかった。うだるような真夏の暑さの最中であつた。東安を夕方出発した。真夜中に友軍の飛行機と異なる騒音のする飛行機が通り過ぎた

と思つたら、ソ連の外相モロトフが戦争を布告してきた。嵐の前の静けさであつた。夜明け頃、牡丹江に着いたところ、戦闘帽に白鉢巻きの決死隊が国境に向かつて前進して行くのに、われわれは後方に下るとはと不思議に思っていたが、後で解つたのであるがソ連軍を包囲作戦にするということであつたのである。

わが部隊は、昭和二十年八月九日、四平街に到着した。しかし、入る兵舎もなく、師導学校に駐屯したのであつた。翌日から東安で貨車積みした糧秣や部隊装備品などを受領のため四平駅から運搬作業をすることになり、真夏の太陽がキラキラと照りつけるなか、戦闘帽をかぶり、上半身裸となつて、汗だくだくとなり輜重車にこれを積んで運搬した。四平駅では一般邦人や開拓団の避難民が列車に鈴なりとなつて乗り込んで、列車は次々ともうもうと黒煙を上げ、悲鳴をあげるのがとく、ボウボウと鳴り響き、ごったがえしていた。まだソ連軍は姿を見せないが、やがて阿鼻叫喚の巷と化す戦場となり地獄絵が展開されるのではないかと予想された。暗雲が漂うなか運搬作業は終わった。

いよいよ戦闘状態に入ることになると覚悟を新たにしました。異常心理となり待機していた。急に敵の戦闘機が空から機銃掃射を、ドカドカン、ドカドカンとあびせかけ殺気立たせる。

そんな雰囲気が続くなか、天皇陛下下の玉音がラジオから流れてきた。「耐えがたきを耐え、忍びがたきを忍び」と悲痛な声での戦いをやめよという意味の言葉であった。ただ茫然とするばかりであった。涙が頬を伝い、力がいっぺんに抜けた。わが国は戦いに敗れたのである。神国日本が宿敵の軍門に下ってしまったのだ。無条件降伏、武装解除である。夜に入るとソ連軍が侵入して来た。不穏な雰囲気か街を包んだ。夜が明けると婦女子が「兵隊さん助けて」とわれわれが駐屯している師導学校に救いを求めて来た。まだ武装は解除していない。場合によっては、彼らと一戦を交えるかもしれない。古参兵の態度が急に豹変し、階級的圧力に屈していたものが酒気を帯びて「いやー戦争に負けてよかった」とどなり散らし、ウニの瓶詰などを投げつける始末である。将校や下士官は身を隠す有様で

あった。夜が明けるとソ連兵が自動小銃を携えてウロウロと校庭に入ってきたが、師導学校であるので、われわれの姿を見て立ち去って行った。婦女子を狙って来たのであろう。三日三晩もゴーゴーと騒音を立てて、戦車や牽引車が四平飛行場に向かって集結された。これはソ連軍に引き渡すためのものであった。やはり奉天においてソ連軍を迎え撃つ作戦であったのである。天皇陛下の玉音が一週間遅れていたら大激戦となり、もちろんわれわれも名誉の戦死を遂げたであろう。シベリアに抑留されて屈辱も受けることはなかったであろう。

やがてわれわれは、四平街の児玉公園において、日露戦争の名将児玉源太郎大将の毫筆による忠魂碑の前で武装解除を受けた。そのときの悔しさは、その場にあったものでないと味わうことは出来ない。部隊長はただうろたえるばかりであった。われわれ兵、下士官は毅然としていたが、敗戦の惨めさをしみじみと味わされたのであった。やがて武装解除も終わり、公園から四キロも離れたところにある陽木林に集結するこ

となり、丸腰となつて、ただ黙々と整然と行進して行つた。見苦しいのは、身体の具合でも悪かつたのか、馬に乗っていた将校がおり、満人の少輩（子供）に石を投げつけられている姿であつた。武装解除を受けても馬に乗りわれわれを見下している姿は憤りを感じずるものであつた。われわれは白旗をかかげて自ら降伏したのではない、天皇陛下の命によつて武装をいさぎよく放棄したのであるという誇りは内心堅持していた。いかなることになつても大和魂を失うことなく後世の笑いものになつてはならないと心に固く誓つていたのである。陽木林に一カ月ほど待機して内地帰還を待つていた。

一般邦人や開拓団の人達が内地へ帰るので混雑することから、われわれはウラジオストク港から帰還するとのことで、昭和二十年九月二十七日、満鉄四平駅から貨車に乗せられた。糧秣を積み込んだ上に乗り込み、ドラム缶を貨車の上にくくりつけ、これは入浴用のものであつたが、見場の良いものではなかつた。われわれの列車の中間ほどに、佐官級の上級将校や、頭

を丸めて戦闘帽をかぶり兵隊の軍服を着た明らかに婦女子と解る女子が二、三人、将校の貨車に毛布などをカーテンに用いて仰々しく乗車していた。われわれの列車は、ソ連兵の服装はしていたがモンゴル人の兵士が警備していた。彼等はソ連兵のように無法者ではないようではあつたが、これから先が案じられた。彼女達の消息はその後聞かれなかつたが、われわれがシベリアに抑留された際、同乗していた高級将校達は同じ収容所に収容されていた。

貨車は一日走つては二日停車してなかなか進まなかつた。約一カ月も列車の旅は続いた。噂はいろいろ言われてきた。日が経つに従つて悪い噂となつてきた。われわれは捕虜となりシベリアに送られるのだという悲観論が流れた。逃亡者が出て射殺されたという。また、死亡者が出て沿線に埋葬されたとの話も伝わつていた。小生は、陽木林で待機中ソ連兵が赤旗を兵舎の周囲に立てて警戒していたので、祖国へ帰す兵隊にそのようなことをせずともよいはずと直感し、これはソ連軍がわれわれを拘束するのだと思つていた。そ

して次第にその線が濃厚となってきた。全く毎日が憂鬱な日が続いた。しかし召集された以上、生命はいつ失うかわからない身であると覚悟を決めて国を出てきたのだ、どうせ命はないものと決めるまでは、なんとも言いようのない気持ちであった。

こうした満州の旅は一カ月余り続き、昭和二十年十月三十一日、ソ満国境を流れる大河、黒龍江を渡ってブラゴエシチェンスクに渡り、入ソの第一歩を踏み込んだのであった。

ソ連はアメリカ製のUSAのマークのついた鉄舟を横に並べ、大河黒龍江に鉄舟橋をかけた（この一つを見てもいかにアメリカが物量を誇っていたかがわかった）。この鉄舟の上に厚板を敷きつめて、その上をトラックや二頭立ての輜重車で占領品の糧秣をドンドン運搬していた。ソ連外交は実に巧妙であった。共産主義国でありながら、資本主義国と提携したのである。満州の膨大な糧秣を二頭立ての輜重車やトラックで必死になってソ連軍が自国へ搬入している姿を見て、この糧秣はわが国銃後の農民が汗水を流して勝っては

しいと供出したものである、僅か一週間で火事場泥棒のように占領してしまおうと思うと、悔し涙がぐっとこみ上げてくるのをどうすることもできなかった。

いよいよ国境を離れようとして鉄舟橋を渡らんとした際、隊伍を組んで進行中、ソ連兵がずかずかと小生のもとに来て、やにわに腕時計を奪わんとした。小生は「何をするか」と一喝した。大声で怒鳴ったので彼はたじたじとした。後尾にいたわれわれに付いていたソ連の歩哨が飛んで来て、口論となった。時計を奪わんとしたソ連兵はすぐごと立ち去って行った。これが二回目である。ハイルン駅で用便中も時計を狙われたことがあったが、にらみつけたら奪われなかった。先が思いやられた。大河黒龍江は、アムール河とも言うが、日本一の信濃川の三倍もある、その名のごとく底知れず黒ずんでとうとうと果てしなく流れていた。われわれは夕暮れ迫る頃、黒龍江を渡り入ソして、ブラゴエシチェンスク郊外に夜営することになった。林の中で、材木の倒木などが散乱しており、焚火をしたのであるが、シベリアの夜は零下となり、凍りつくよ

うな寒さが身にしみて、これから先どうなるのだろうと不安が募るばかりであった。携帯食の乾パンをかじりながら焚火を取りまいて車座となっていたのであるが、夜が更けるにつれてますます寒気が加わり、背後は冷えて眠れるものではなかった。くるりと向きをかえても同じことで、ついに一睡もせず夜が明けた。輜重車に装具を積んで出発した。太陽が出ると凍結した土が溶けて車がめり込んで走らない。やつとのこと、ブラゴエンチェンスクの街にたどりついた。マーリンケ（子供）らが寄って来て、ジャボンスキー・サムライ・ハラキリ・マツオカバンザイ・マツオカハラジョーとののしり、市民はさげすみの目で見ている中を敗残兵そのもののごとく行進して行くのであった。

戦後半世紀が過ぎた。我が国も戦争を知らない世代となつてきて、毎日のように凶悪犯罪が発生し、尊い人命が殺傷され、報道機関が世間をにぎわしている。これはどうしたことであろう。このようなことでは世の中が乱れ、再び戦火の嵐が吹くのではないかと懸念されるものである。

昭和二十年十一月三日、アムール鉄道（シベリア鉄道でモスクワ—ウラジオストック間運行）に乗り、今度は満鉄のように一日走っては二日止まるというようなことなく、バイカル湖の駅に停車した以外はほとんど僅かな時間しか止まらずに猛スピードで走り、一週間後の十一月十日、シベリア第一の都市で人口六十万と言われているイルクーツクに到着したのである。イルクーツクの駅に下車しスイトンを作っていたが、マーリンケ（子供）が蝟集してきて、外套のポケットに手をつ突っ込んでうるさくまつわりつくので、ポケットに入れてあった乾パンを地上に投げつけたところ、ワッと言つて芋虫にアリがたかたかのように折り重なつてむらがる姿を見て、これはよほどソ連では食料が切迫しており、ほとんど配給にも事欠くような現状であると見受けられた。このような有様であったので、抑留されたわれわれにも満足に食料を支給できなかったのである。到着の夜は駅付近の倉庫のような所に泊りして、翌日の昭和二十年十一月十一日、イルクーツクの郊外でイルミジョウという所の収容所に収容された

のであった。

イルクーツクはもう白雪の舞う冬に入っていた。イルクーツクの街は古く、アンガラ川のほとりにヨーロッパ風の街並みをした近代的な建物が立ち並び、モスクがところどころにアラビア風の風景を見せていた。

革命当時、ツァー（皇帝）の姫が革命軍に追われ、アンガラ川に身を投げ亡霊となって人々を悩ませたという。アンガラ川の水は透明度が高く水量も多いが、この川に橋がかかっており、近代的な立派な橋であった。橋の上から眺めると風光明媚の観を呈している。

シベリア出兵当時は日本軍がこのイルクーツクまで進駐して来たと言われている。われわれが收容された第六收容所は、橋を渡って更に四キロメートルほど南方に丘の上に建っていた。收容所は間口十メートル、奥行五十メートルほどで、中央が二メートルほどの廊下とも言うべき通路になっている。廊下をはさんで両側は二段構えの板敷きとなっており、この板敷きが各人の起居する場所であった。畳一畳に二人というスペースで、板の上に着のみ着のまま就寝するという有様で

あった。この建物は四棟あって、一個大隊八百人ほど收容されたのである。極寒の地であるので建物の両脇は土盛りがしてあり、明かり窓が取ってある。中央に暗い電灯が二個とベーチカが設置されている。まだできたばかりで、すべて丸太や板も松で生木であった。收容所の周囲は二重に有刺鉄線が張りめぐらされて四隅に望楼が立ち、ソ連兵が警戒監視している。重罪を犯した凶悪犯人の收容所のようなのである。收容所の出入口にはソ連兵の衛兵所があつて二十四時間厳重に警戒監視を続けていた。

われわれを收容した目的は、当時ソ連では五カ年計画で行われていた年間三万台製作する自動車工場建設のためのものであった。煉瓦造りのもので、一部鉄柱が立っていた。工場附属の火力発電所の基礎工事がはじめられ、製材工場などが開始されたばかりであった。

收容されても食糧の支給はなかった。われわれが携帯した食糧は全部食べ尽くしてしまったが、ソ連ではまだあるとして支給しなかった。收容されて四、五日

経って、耐えられる者は使役に出るよう言われ、小生と五人ほどで使役に出た。ソ連兵の歩哨が詰めている建物のペーチカに使う煉瓦を運ぶ作業であった。現場に行つて見ると、倉庫の中にキャベツがトラック一台分ほど積んであり、歩哨のスープ用のものであった。空腹でふらふらしていたので歩哨に手まねで食べてよいかというと、よいと言うので、たちまち十個ほど食べてしまった。歩哨は啞然としていた。

昭和二十年十一月二十日頃から作業に出ることになった。ソ連兵の歩哨宿舎を建てるための穴掘り作業であった。シベリアでは十一月も下旬ともなれば零下二十五度から三十度にもなる。土は凍土となり、一メートル以上は鉄より硬く凍結している。この土をロームと言つて長さ一・五メートル、直径三センチほどの鉄棒を、ドスン、ドスンと凍土に打ち下ろすのであるが、ピンとはね返つてなかなか掘れるものではない。これを一メートル立方を掘るのが一日のノルマであった。防寒具で身を包み、自由もきかない。シベリアは太陽がなかなか出ない。どんよりとした曇りの日

が多い。バイカル湖の方から霧のようなものが吹いてくると針をさされるような痛みである。いても立ってもいられないほどの苦痛である。身体に力を入れて掘ろうとしても、毎日与えられる食料は腹八分目どころか半分にも満たない。満州で過ごした体力がまだあるので辛うじてこれに耐えられるが、一日八時間労働で昼の時間一時間休むことしかできない。歩哨もつきつきりである。手を休めると、マツセル（監督）が来て、ダワイダワイ（やれ、やれ）と足でけとばしたりする。わずか一時間がとても長く感ずる。まさに生き地獄であった。一日の重労働が終わつて収容所に帰つても水のようなスープに黒パン二百グラムである。着のみ着のまま横になって死んだようになって眠るのである。

入浴は一カ月に一回、三キロもある街に日曜日に出かけ、バケツに二杯の湯しか貰えない。環境の悪さに風がわいて、腹巻にゴマを振つたようになる。このようなことから体力のある者でも次第に衰弱してきた。

このような状態が収容されて半年間も続いたのであ

る。收容された翌年の五月頃、ようやく春めいた頃にこの地獄の作業も終わりほっとした。ソ連では日本軍が暴動を起こさないよう体力を消耗させる目的ではなかったかとさえ思われた。

戦中の軍隊においては初年兵教育の暴力的絶対服従という問答無用の不満が内在している毎日であった。しかし敗戦により抑圧的な雰囲気がなくなり、何か神仏が乗り移ったような、自分でも不思議と活動的となり、きりきりとした動作が自然とわいて何事にも率先して積極的に立ち向かうようになり、軍隊での将校クラスの幹部にも受けが良かった。分隊長の憲兵准尉から、ソ連から測量の助けに出てくれと言ってきたのでどうかという事になり、測量の心得のある戦友三人とこれに出ることになった。測量はロシア人二人で男女の測量士であった。この測量は、アンガラ川から工場に水を引くための測量で、一般家庭にも引くことになり、ロシア人の家庭の人達にも接することが出来た。作業にはソ連兵の歩哨もつかず解放された気分となり、ロシア人の測量士もわれわれには親切にしてく

れた。地獄で仏に会ったような気分であった。この作業も半年ほどで終わり、秋風が立つ十月頃製材工場の作業に出ることになった。

收容されて一カ年近くになる昭和二十一年十月頃、ビスカノボーイ（ソ連の歩哨がつかない）で製材工場の作業に出ることになった。ソ連側も信用したのか、小生に作業責任者としてサインをして收容所を出て製材工場の作業をせよとのことであった。製材工場の作業は無経験である。作業現場に行くと見ると、幅一メートル、高さ一・五メートルほどの鉄柱の寸法に合わせたノコギリが取り付けられて上下に作動している。丸太をかけると、ザッザッと騒音を立てて大規模なディーゼルエンジンで作動するのであるが、初めてのことでとても寄りつけたものではなかった。一日のノルマは、十一人で長さ六・五メートル、直径末口三十センチの丸太を三十五本切らなければならないのである。ノルマを百パーセント上げなければ百パーセントの食料は支給されない。百パーセントの食料でも満腹感には七十パーセントである。これは大変な仕事であ

る。しかし、強制労働はやらなければならないのである。おが屑が大量に出るので高さ二メートルほどの高さまで丸太を押し上げなければならぬ。そしてトロッコに丸太を上げて製材機にかけるのである。ワッセワッセと力を合わせて押し上げるが空腹でなかなか上がらない。松の皮を口にしてみるが、腹の足しにはならない。空腹で力が出ない。苦し紛れに力んでも一人の力がゆるめば逆戻りしてしまう。マッセル（監督）は、ジャボンスキーはヒートリ（日本人はずるい）だ、声だけあげて力を出さないと言う。このような苦しい日が続いて隊員の衰弱が目に見えて出てきた。このままでいくと全員オーカー（病人）になってしまう。われわれは生きるため真にやむを得ない行動に出ることにした。それは、製材所の直近に火力発電用の石炭が貨車積みされて停車していた。この石炭を深夜、地方人の警備歩哨が警戒していた。これは銃を携帯して警戒していたが、深夜彼等の警戒の油断する隙を見て、塊炭の石炭で三十センチ立方のものをひそかに窃取して、これをおが屑の山の中に隠匿した。

第一段階は成功した。この命がけの集団窃盗を敢行するに際して、隊員に計ると、古参兵隊の戦友は「もし見つかったら責任者の君は祖国に帰れないから」と反対したのであるが、「発覚しても俺一人犠牲になればよい、このままでいると全員が帰れなくなる」と言うのと、隊員は、「よし、やろう」と賛成してくれたのであった。一週間ほどたって、船員から召集になった体格のがつちりした豪傑そうな男盛りの戦友が、よし俺が街へ持って行って食料と交換して来ると言っていて、南京袋に石炭を詰めて、因幡の大黒様のように肩にかついで、夜を利用して街に行き、ジャガイモと交換して来た。ビスカノボーイの夜間作業である。ラボーチ（ソ連人の機械の運転手）は寒い外には出ない、ソ連の歩哨がいないので好きな行動が出来るのである。ソ連の地方人はわれわれが食料が満足に与えられないことは知っており同情していたし、彼らも塊炭一個あれば長く暖かいペーチカの部屋で過ごすことが出来るのである。われわれも深夜の休憩時間に湯がいて、ホカホカと温かいジャガイモを食べ、ひとときの幸福感を

味わい、隊員の体力も出て来て、ノルマ百パーセントから次第に百五十パーセントも上げることが出来た。百五十パーセントとなると、綿羊の肉が粟粥に入っているものが飯盒に半分以上入っており、腹いっぱいになった。これは次第に作業能率が上がるので気づかれなかった。このようにして難関の製材工場の作業も半年間最も酷寒のひとつきを過ごすことが出来たのである。全く神仏の加護と言わざるを得なかったのである。

人間は苦境に慣れるということは恐ろしいものである。地獄のような苦しみに耐え抜いてみると恐ろしいものはなくなるものである。あゝのときの隊員は全員小生より一年半も早く祖国に帰ったはずである。便りはないが貴重な体験をしたので必ずや祖国復興に貢献したと思う。

昭和二十二年五月頃から煉瓦工場の作業に行くことになり、収容所からトラックで一時間ほどかかる所の煉瓦工場で煉瓦をトラックに積み込む作業をした。隊員は製材工場で働いた隊員であった。その工場には、

ドイツの女性が働いていた。腕に番号を記入した腕章を巻いてキビキビと働いていた。彼女達は明らかにソ連の女性とは異なる理知的な顔をしていた。われわれがマガジンから黒パンを買うことを頼んでも快く引き受けてくれた。目方で売ってくれるので、サイコロのような小さいものまできちんと渡してくれた。しかし、ソ連の女性に頼むと小さいものは取り上げてしまうのである。ドイツの女性は、自分も空腹であろうに、彼女達は誠実であった。

ある日、隊員に黒パンを買って来るようにと言われてマガジンに行ったところ、ソ連のラボーチ（労働者）風の男達が二人おり、そのうちの一人がいきなり小生の口に瓶を突っ込み、ウオッカと思われる液体を流し込んだ。小生は思わずこれを飲み込んでしまった。ラボーチはハラシヨウと言って立ち去っていった。突然のことで黒パンを買わずにマガジンを出ると、気持ちよくなり、ふらふらと工場の北側にあるリング畑で休もうと思っ行って行ったところ、リングの花の下で少女達がトランプをして遊んでいた。この少女達

は、スターリンの政策で、ウクライナから家族とともにドイツに協力したとして強制移住させられ煉瓦工場に働かされており、昼休みの時間に遊んでいたのである。小生はこの少女達を眺めているうちにウオツカの酔いが回って眠り込んでしまった。目がさめて気がつくともう太陽が西に傾いていた。既に四時間ほど眠り込んでしまったのである。これは大変と隊員のところへ戻って来ると、日頃怒ったことのない隊員が火のようになつて怒っている。無理もない。平謝りに謝つた。彼らのはてつきり隊長は逃走してしまつたと青くなつて心配していた。今までの例で逃亡者は見つかり次第銃殺で、さらし者とされるからである。幸いビスカノボーイでソ連の歩哨がつかないので事なきに済み、理由を話し隊員の理解を得て自分ながらホツとした。今まで逃走者が成功したことはなかった。小生は常に隊員とともに働き、先頭に立つて三十歳の盛りを活動した。これはどうしたわけか自分でも不思議に思つた。軍隊での階級的抑圧から解放されたこともあり、隊員の人間性を尊重し同志的団結をはかり、一人の人間

間が動くように力の結集を呼び起こすことが大切であると、決して怒ることはしなかった。もうカマンジール（作業責任者）として一年近くになるのであつた。

昭和二十二年九月頃から、イルクーツク市内にある、規模の大きい、煙突が五本もある火力発電所の作業に出ることになった。人口六十万の電力を賄うだけに発電に使用する石炭も相当なものであつた。この発電所は、アンガラ川東岸に位置し、古風なヨーロッパ風の街にふさわしい大規模な施設で、終始石炭がトラックで運搬されていた。これをトラックからおろす作業やクレーンで移動させる作業をした。クレーンで石炭を吊り上げて、高さ二十メートルほどの鉄骨で組んだタワーと発電所の間をつなぐトロッキに石炭がかけられると、トロッキが自動的に石炭の焚口に移動する仕掛けとなつていた。

これらのクレーンで作動する石炭の作業は、われわれ二十五人ほどの作業員で昼夜二交代でやつていた。この作業隊の責任者として行くことになつたのである。この発電所には地方人の警備員が銃を持って警備

していた。大規模な発電所で石炭を用いて発電する火力発電所であるだけに灰も相当に出て、これを処理する作業はソ連の労働者がやっていた。うす暗い電灯の下で灰と煙でもうもうとするなかを、ゴム帽子のようなものをかぶって、水蒸気で目も口もあけることが出来ない地獄の底のような所で黙々として働いていた。これらの労働者はやはりウクライナ方面から強制移住せしめられた人々ではないかと思われた。幸いわれわれにはこの作業はさせなかった。このような不衛生な作業をやらせられたら必ず肺系統の疾患になるおそれがあり、この作業はなかったので救われたような気がした。

夜間作業が終わって帰るのが朝の七時頃になるのだが、マッセル（監督）がなかなか自動車を出してくれない。隊員は空腹をかかえていらいらしている。朝九時頃ようやく車が出る状態が続くことから、ある日マッセルと口論となり、ついに取っ組み合いとなった。さあ大変、われわれ隊員と発電所の従業員との喧嘩となつてしまった。われわれ隊員は徒歩で帰ろうとして

門の所まで行ったところ、警備員が銃を向けて来た。「よし撃て」と言つて銃の前に立ったところ、彼は銃を下げてしまった。カントラ（事務所）からヨッポイマーチーと言つて上役が出てきて、トラックを出したので、これに乗つて収容所に帰つてきた。翌日発電所に行つたところ、マッセルはラポーチ（労働者）に格下げされていたが、彼はあっさりとしていた。それからは、きちんと送り車を出すようになった。

ソ連の将校は程度が低いように見受けられた。収容所長のグリゴリーエフ大尉は、我々が見ている前で平然と右手で黒パンをかじり、左手にイワシをぶらさげて、かじりながら物品倉庫の前に立っていた。彼は我が軍から占領した軍馬に乗つて威張っていた。高級な巻たばこをくわえていて、我々の働いているところへ来て地面に煙草をばらまいて、これを拾う戦友をさげすんだ目付きで眺めて帰つて行く。彼は我々に支給すべき食糧を横流しをしているという噂が立っていた。現に、一週間ほどキャベツに粟つぶがからまっているものを食わせたりすることが、二度、三度あった。八

百人からの抑留者の食糧であるから相当なものであった。我々の中で東大出身の在満高官であった人が食糧が悪いと折衝したところ、他の収容所へ移動させられた。ソ連側にすれば捕虜の分際で勝手なことを言うなということであったのだろう。どうにもならなかった。

火力発電所の作業も昭和二十三年三月頃で終わり、自動車工場の建築作業で、これは煉瓦の運搬や積む作業の助手などをやって、夏も過ぎる頃ダモイ（祖国へ帰る）の話が出て来た。昭和二十三年の秋に入る頃であった。ハラシヨラポーター（良く働いた者）は帰れるが、反動（憲兵、警察官、政府の要人であった者）、プローホーラポーター（良く働かなかった者）は帰れないとのことであった。待望のダモイの話に収容所内は騒然とした空気が漂っていた。その頃、小生はソ連の政治部將校に呼ばれて、特高警察官ではないかと取り調べを受けた。あとで、日本共産党徳田球一書記長がスターリンに、憲兵や警察官はプロレタリアの敵であるから帰さないようにという指令を送ったと

いうことを知った。何ということだ。わずか一カ年の新任警察官で召集を受けたのである。それに、真面目に作業責任者などをやって働いたのに。誰よりも先に帰れるはずであると思っていた。しかし、これもやむを得ないことであると観念していたものであった。

ダモイの話が出てくるまでには、地獄の苦しみにも耐え、悪環境のもと、しかも極悪な食料事情、豆ばかり一週間も主食として食わされたり、キャベツに粟粒がついたものばかり毎日食わされたり、コウリヤンを原穀のまま食わしたり、牛馬さえ顔をそむけるような食料であった。環境に慣れるというものは恐ろしいものであると痛感した。三年経っても食料事情は改善されなかった。野草を飯盒で湯がいて岩塩で味付けをして、これを食し体力の消耗を防いだ。牛馬は草を食べて生きている。人間も草で生きることを体験した。生命を保つぎりぎりの線の三年であった。ハラシヨラポーター（良く働く者）の戦友は帰還者名簿に載り、天にも昇らんばかりの気持ちで喜々として収容所を後に振り返り振り返り、「元気でなあー、頑張ってくれ」

と手を振って帰っていった。後に残されたプロホーラポータ（良く働かなかった者）と反動と称する者は茫然自失の面持ちで、落胆した力の抜けた哀れな姿に見えたであろう。後に残された者達も、いよいよ酷寒のシベリアの冬に向けて二、三日後、灰色の空のもと収容所を後にイルクーツク駅から更に西方に向かって送られて行ったのである。運命の神はこうも苛酷に責めたいのか。僅か一年の警察官であった自分をこうも苦しめなければならぬのか。国を出てから滿五年近くになる。同期で召集されない者は出世しているだろう。最も出世盛りの期間、国家に捧げてきた。全く不公平極まりない。しかし戦死した戦友やシベリアの凍土に眠る戦友のことを思えばまだ生きているだけでも喜ばなければならない。

運命の神は更に奥地、チェレンホーボの炭坑に連行したのである。そこは石炭が露天掘りされていた。大規模な採掘が行われていた。イスカバートルという機械で表土をトロッコに積んで遠くへ運んでいた。厚さ五十メートルも掘ると黒光りする立派な塊炭が層を

なして広がっていて無尺蔵と言われている。まだ採掘が始まったばかりのようであった。

小生の作業隊は憲兵、警察官であった者ばかりの作業隊で十五人ほどであった。われわれの作業は、その炭坑で石油を燃焼させて電気を起こす発電機を、線路上に停車せしめ移動式のを格納する倉庫を作るための基礎工事であった。最初は柱を立てる穴掘り作業であった。この発電機もドイツからの戦利品であったと思う。当時ソ連では、ドイツの知識人も抑留し、すぐれた知識を導入したと言われていた。穴掘り作業も、入ソ当時とは異なり、もう三年も経っていることから要領を得ている。五十センチほどは鉄のように凍結していたが、朝晩暗いうちに行き帰りするのに歩哨もつかず三々五々徒歩で約五キロメートルほどの道をとぼとぼと歩いて通う。朝暗いうちに飯盒に粟粥をつけて腰に下げて凍結した道を行くのであるが、途中に乳牛の飼料にする乾草ニオが所々に散在している。この乾草を失敬してひとかかえ持って行き、作業を始める前に火をつけて燃やし、近くの松丸太を持って来て

燃やす。松丸太は油があるのでよく燃える。凍結した土は溶けて三十センチほど掘れるので、あとは二十センチほど掘れば一日のノルマは達成できた。このように穴掘り作業も入ソ当時のような地獄の苦しみはせずともよかった。石の上にも三年というが、もう地獄の生活にも慣れ、明るい希望が沸いてくるのであった。

しかし、その一方ふと不安な気持ちになった。このまま永久に帰れず凍土の下にうずもれてしまうのではないかと暗い気持ちになるのであった。

軍隊では、警官から召集となり目の敵にされた。終戦になったとたんにシベリアに抑留され三年半も過ごし、戦友は喜々として祖国に帰っていった。小生は更に奥地に連行され四年目の酷寒の冬を迎えようとしている。僅か一年の警官生活がうらめしくなった。今年の冬は越せるだろうか、いやこのシベリアの地で果ててたまるか、石にかじりついても生きのびて祖国の土を一步でよいから踏んでからという強い信念が湧いてくるのであった。幸いここはソ連の歩哨もない。ソ連では、もう日本軍は逃げも隠れもしないと認めたの

であろうか、そしてわれわれの作業隊は憲兵、警察官であるだけに信用していたのであろうか、マッセル（監督）もおだやかであった。特にイルクーツクの実績や態度が身上書となつてついてきているかのようにすべてがわかつているようであった。約五キロメートルの道を徒歩で作業場に往復するのであるが、別に隊伍を組むでもなく各個ばらばらで、普通の通勤者のように腰に昼食の粟粥を飯盒につめてぶら下げて作業場に通うのであった。昼食の粟粥を凍っているので火で温めると水のように溶けてしまう。これをのどに流し込んで終わりである。実に情けないのであった。

われわれの作業場にはウクライナから強制移住して来た女性達が働いており、われわれ日本軍が珍しいのか、昼休みに話しかけてきた。特に彼女達はスワラジ（手相）を好み見てくれと言つて来るので、多少その心得もあったので見てやると、ハラシヨウと言つて黒パンなどを礼に持つて来た。これは面白いと思つて近くにあるロシア人集落に出かけて行つて手相を見てやり、ロシア人家庭を見ることができた。老婆は涙を

浮かべて、すぐ帰れると同情していたのであった。

われわれだけの砂取り作業に遠い所に出かけたときであった。トラックに砂を積み込めばよい作業であり、よい機会であると員数外の新品同様のスコップを携えて四キロメートルも離れたロシア集落に行き、ジャガイモと交換して、袋を肩に担いで帰って来て休憩した。何のためにこんなことしなければならぬのか、いつ帰れるかわからない、近くにノモンハン当時の日本軍がソ連に捕虜となつて将校以下一個小隊ほど帰化し「コルホーズ（集団農場）」をやっていると、逃げてそこへ行こうかと考え込んでしまった。ふとそばにインチュウホアの花が一輪咲いていたのが目に入り、亡父が帰れと叱ってくれたような気がした。はっと思ひ出し、急いで帰って行くと、遠くの方でバンザイと言つてスコップを叩いている。みんな心配していたのだ。遅くなつてすまなかつたと言つて肩に担いだジャガイモを下ろすと早速飯盒で湯がいて、ホカホカとする芋をほうばつて、うまい、うまいと言いつながら食べている姿を見て、熱いものが込み上げてき

た。よかつた逃げないで。食べるものが何よりも楽しいのである。人を楽しませることは気持ちの良いものである。

その頃、ソ連の高級将校が收容所に来てわれわれを集めて挨拶をした。「君達は尊い体験をした。わが国ソ連の労働学校を卒業したのだ」と言ったことを今でも忘れない。地獄の苦しみに耐え抜いたのである。命がけの体験であつたのだ。いかなることに直面しても健康でさえあれば恐れることはないという自信がついたことである。ソ連の高級将校の挨拶が終わると間もなく移動することになった。われわれの中にはダモイだと喜ぶ者もいたが、小生は信用しなかつた。案の定、ハバロフスクまでで、ナホトカには行かなかつた。しかし列車の旅はシベリアの春で六月頃であつたので、バイカル湖畔の大自然の風景は、雲つくばかりのウラル山脈の麓に位置しているのである、雄大な眺めであつた。

ライチハは炭坑の町であつたと記憶している。收容所はすべてが整備されており、こんな收容所があつた

のかと驚くばかりであった。昭和二十四年六月中旬頃、ハバロフスクのライチハ收容所に入所した。入所した当時は南京虫に悩まされたが、これも二、三日で出なくなった。われわれの作業は一般民家の補修作業であった。共産主義運動が盛んに行われていたと見えて、掲示板などに天皇制打倒などと標語が書いてあり、『日本新聞』の輪読が行われていたが、われわれ反動にはアクチーブも何にも言わなかった。ハバロフスクへ来て一カ月くらい憲兵と警察官は一緒に作業していたが、自分では何にも自覚症状がないのに入院せよとのことで入院させられた。入院して清潔なベッドに起居させられ給与もよかった。何か狐につままれたような感じであった。ベッドの枕元には、唯物史観とかソビエト人民が歩いた道などの分厚い本が並べてあったが、小生は別に読もうともしなかった。

昭和二十四年八月初旬頃、水道管敷設工事の作業隊長として作業に出ることになった。隊員は三十人ほどであった。幅二メートル、深さ三メートルほどの穴を掘り下げて直径三十センチほどの水道管を敷設する工

事であった。八月といっても一・五メートルも掘り下げると凍結しており、これを割って二・五メートルから三メートルも掘り下げると凍結はしていなかった。ハバロフスクはシベリアとしては暖かい方であるが、夏でも一・五メートルも地下は永久凍土となっていた。不幸にして他界された戦友は永久凍土に眠っているのである。三メートル掘り下げるとトンネルを掘り、隣の戦友の穴と連結することで水道管を連結することを提案して、ソ連の監督に感心された。体力のない戦友はそのトンネルで休ませるように体力のある者が助け合うことにして、マッセル(監督)は、ビドロタスカイ(水をくみ上げる)としてナリヤード(作業成績)を書いて、休ませている戦友の分も見てくれた。今まで接した監督の中では一番の親日派の監督であり、シベリア出兵当時の落としたねではないかと思つた。ハバロフスクでは三十七作業隊があつたが、その作業隊のうちで作業成績五位まで上げることができた。マッセルは、「君は日本に帰らずソ連に残つてはどうか」と言っていた。小生は笑つて、「いったん日

本に帰って出直して来る」と答えた。足掛け七年の歳月が流れた祖国は遠い夢のような感じがした。ライチハの収容所は朝作業に出発する際は赤旗が掲揚され、隊伍を組んで労働歌を歌い、作業から帰る際も労働歌を歌いながら収容所へ入るのであった。ソ連は労働者の国で、労働者が先頭でメーデーの行列が行われる。労働成績を上げる者は英雄視された。

昭和二十四年十一月下旬、待望のダモイの名簿に載ることができて、ナホトカで一週間ほど船待ちをしながら、十一月末日、栄豊丸七千トンに乗船することができた。終生忘れることの出来得ない感激の帰還であった。船のタラップを上り乗船して、これでやっと生き返った心地になり、ナホトカの丘がボーッと涙でかすんで見えなくなった。乗船中、日の丸組と赤旗組もみ合い、赤旗組は要求貫徹と称して上陸を拒否した。日の丸組はさっさと上陸してしまった。甲板から船室に戻って見ると飯盒や水筒が日の丸組に持ち去られていたし、舞鶴に上陸して引揚者名簿を見ると自分の名簿の頭に赤丸がついていた。日の丸組の仕業であると

思われた。日の丸組は将校が主であった。小生は軍隊に最後まで嫌がらせをされた。この赤丸がついたため、復讐する際共産主義者に見られ、レッドパーシが あったのだらう、よい所があったらそちらへ行つてほしいと言われ啞然としたものであった。自画自賛のようであるが、小生と共に働いた戦友は何らの事故もなく五体満足で祖国へ帰ることができた。それは戦前世界一と言われた犠牲的警察精神の賜と痛切に感じている。舞鶴で将校の日の丸組は真新しいピカピカの軍服を来て颯爽と歩いて、「やあ」と敬礼していた。失敬な奴らだ、国民を戦争に駆り立ててどこまで反省できないのかと怒りを感じたのであった。立派な軍人ならこちらから敬礼する。

我が国は太古の昔から神の国、仏の教えによって三千年近い歴史を有している。度々戦いはあったが、これは時代の転期であり反省の時期であったのだと思う。第二次世界大戦という世紀の嵐に遭遇したが、幸いにして再び立ち上がることができた。この世界に比なき国を後世に伝えなければならないと思う次第であ

る。

終わりに、シベリアの凍土に眠る戦友の御冥福を祈念して終わりとする。

【執筆者の紹介】

経歴

生年月日 大正七年一月二十四日

新潟県川治村立尋常高等小学校を卒業。少年時代、鉄道省信濃川発電工事事務所で給仕などをやり、青年時代は家事農業に従事。昭和十七年五月一日付をもって新潟県巡査を拜命し、新潟警察署に配置される。現職一年にして、同十八年十月五日会津若松東部二十四部隊に召集入隊し、同十月二十日満州第一三八七部隊に転属。同二十年八月八日四平街に移駐し、同十五日終戦により陽木林に集結。同九月二十七日満鉄に乘車し、同十月三十日黒龍江を渡り、ソ連領ブラゴエシチエンスクに入る。同年十一月十一日と記憶しているが、イルクーシツク第六收容所に入所。測量助手、製材工場、火力発電所、煉瓦工場、工場建設などの作業に

従事。昭和二十三年十月下旬頃チェレンホーボ炭坑に移送され、建築の基礎工事作業などを行う。翌二十四年五月下旬頃ハバロフスクに移送され、一般住宅の補修作業、水道管布設作業などを行う。同十一月下旬ナホトカに移送され、帰還船栄豊丸七千トンに乗船し、同十二月四日舞鶴港に上陸し、帰郷した。

昭和二十四年十二月二十日頃警察官に復職し、昭和五十年三月三十一日付をもって円満退職した。

(新潟県 山崎 菊司)

三年間のシベリア抑留記

石川 山本 利男

第二次世界大戦が終わって半世紀以上が経過した今日、日本は本当に平和で豊かな国になったと思う。喜寿を過ぎた私にはすべてが驚きと夢のまた夢である。静かに瞑想すれば、「欲しがりません！ 勝つまでは」と勤勉節約の少年時代↓「死生を貫くものは崇高なる